学位論文題名

柳宗悦の朝鮮芸術論と朝鮮社会

—近代日本の朝鮮芸術研究と柳宗悦の活動を中心に—

学位論文内容の要旨

[形式] 本論文は、はじめに、第1部(第1章～第3章)、第2部(第1章～第3章)、おわりに、によって構成され、400字詰め原稿用紙に換算すると約561枚に相当する。なお、注は各章の末尾に付されている。

[内容] 本論文は、柳宗悦の朝鮮芸術論を、日本人によって書かれた先行する朝鮮美術史と比較検討し、更に朝鮮民族美術館の設立に尽力した柳の当時の朝鮮社会における受け取られ方を、主に新聞雑誌の記事をもとに究明しようとしたものである。その意味で、この研究は、柳の朝鮮芸術に関する思想を、日本社会における朝鮮美術史観と、朝鮮社会における自国の美術に対する認識の両面から位置づけようとした試みといえる。

本論文の第1部では、明治30年代から40年代に書かれた朝鮮美術史、主に八木奘三郎の「韓国の美術」、関野^{ただし}貞の『朝鮮藝術之研究』、そして朝鮮古書刊行会編纂の『朝鮮美術大観』と、柳の朝鮮芸術論との比較検討が行われている。第1章から第2章にかけて、これら先行する美術史の細かい相違にも目配りしながら本論文が明らかにしているのは、いずれの歴史記述にあっても中国から日本への美術品やその様式の伝播が重視され、朝鮮はその経路=媒介としてしか位置づけられていない点である。またそうした経緯に伴う特徴として、中国や日本との関係が希薄になった時代の美術作品、特に李氏朝鮮の時代のもの^がきわめて低い評価しか与えられていないことを指摘している。

第3章では、こうした先行する美術史の傾向と対照しつつ、柳宗悦の朝鮮芸術論が分析されている。柳の朝鮮芸術への注目は、朝鮮の独立運動を弾圧する日本政府への批判によって一気に表面化するが、そこから本論文は、まず日本や中国による侵略が朝鮮芸術の衰退をもたらしたとする歴史観を手にする柳の姿を浮き彫りにする。ただし、柳がこうした衰退史観に満足することなく、歴史的な抑圧ゆえに悲哀の感情が生まれ、線の美という独自の様式が育まれたと、その論を展開していった経緯を示している。また地理的歴史的要因を組み合わせ、先行する朝鮮美術史が最も衰退した時期と捉えた李氏朝鮮の時代に、この独自の美が隆盛を極めたことを論証している点をも明らかにしている。

しかし、本論文は、このようにして完成する朝鮮芸術論が、必ずしも柳の独創によるものだとは見なしていない。先行する美術史が中国から日本への美術品流入の経路と見なした朝鮮に文化的独自性を求め、李朝時代の芸術を衰退期から最盛期へと読み替える柳が用いているのは、いずれも先行する美術史が提示した地理的歴史的な枠組であり、柳は大正期になっても広く流布していたこうした枠組みにとらわれながら、いわば否定的に位置づけられたものを肯定的なものへと反転したにすぎないと論じている。

一方、第2部で本論文が着目しているのは、第1部でその内実が明らかにされた柳の朝鮮芸術論と、その芸術論に基づいて設立される朝鮮民族美術館とが、主に当時の朝鮮社会でどのように受容されたかという問題である。まず第1章では、武者小路実篤等、白樺派のメンバーと構想した白樺美術館が俎上に乗せられ、この検討から、柳が特に19世紀後半の西洋近代美術を、普遍的な美として規範化していた事実に注意を促している。したがって朝鮮芸術に独自の美は、この普遍的な美に照らして認知される特殊民族的な実現となるが、本論文はここに柳の脱政治化の契機をみる。つまり普遍／特殊の二元論によって、朝鮮に独自の美が保証されることに自足する傾向を深めてゆく柳には、単に3・1独立運動を契機に日本の植民地政策が武断政治から文化政治に変容するからだけではなく、もともと植民地統治をめぐる政治を看過する契機が、その芸術思想のうちに胚胎していたのだと論じている。

このような問題は、続く第2章で取り上げられる、朝鮮総督府の機関誌の役割を担った新聞「毎日申報」による柳の思想の受容と奇妙な相似形をなしている。本論文は、柳がまだ植民地政策批判を展開していた頃のエッセイ「朝鮮の友に贈る書」が、日本で公表される際には独立運動の弾圧を批判した部分が伏せ字にされ、朝鮮側の武力闘争批判と芸術による相互理解のみが強調された内容になっている点に注意を促す。ところがそれは、「毎日申報」が柳の朝鮮民族美術館構想を報道する際の論調とほとんど同じであり、またこの論調が、政治的な闘争から文化的な相互理解へと朝鮮社会を誘導しようとした、総督府による文化政治と軌を一にするものであることを明らかにしている。つまりこの結果、柳の「朝鮮の友に贈る書」は、日本でも朝鮮でも、植民地政策批判を欠落させて流布することになるが、しかしそれが柳自身のその後の思想の変容（独自の美の発見に充足して、政治的批判を行わなくなるといった変化）と一致していると論じているのである。

ただし本論文は、第2章の後半と第3章において、このような柳の芸術論の限界を越えた受容が、当時の朝鮮社会にあった事実をも示している。たとえば朝鮮の民族系の新聞「東亜日報」に多くみられる論調は、柳が見出した朝鮮芸術の独自の美に、民族主義的な高揚を重ねるものであり、そこでは普遍的な美などまるで問題にされていない。また同じく民族系の雑誌「東明」の記事には、今は民族の芸術になど構っている余裕はないのだから、それは柳の美術館設立に任せ、もっと火急の問題に注意を向けるべきだと暗に政治的抵抗への奨励がみられる点をも、本論文はぬかりなく指摘している。更に美術館設立をめざす募金活動の一環として開催される宗悦夫人・柳兼子による音楽会に着目し、朝鮮社会にお

ける大きな反響のうちには、儒教的な家父長制と適合的な内助の功を实践した兼子に対する良妻賢母主義的な礼賛だけではなく、むしろそれに抵抗する女権解放運動の期待など、実に多様な受容がなされていたことを明らかにしているのである。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 中 山 昭 彦
副 査 助 教 授 水 溜 真 由 美
副 査 助 教 授 権 錫 永

学 位 論 文 題 名

柳宗悦の朝鮮芸術論と朝鮮社会

— 近代日本の朝鮮芸術研究と柳宗悦の活動を中心に —

本委員会は、上記の論文を審査するに際して、基礎的な手続きの面と内容面とに分け、本論文が新しい研究の方向を拓くものと評価できるか否かを検討した。基礎的な手続きとして検討したのは、柳宗悦の朝鮮美術論およびそれと比較対照される先行する朝鮮美術史、朝鮮社会における柳の評価を明らかにする目安となる新聞雑誌の記事群等を分析する上での、必要とされる文献資料の適否、当該分野の研究史の把握の度合いと参考文献の理解度、文献引用の正確さ等の点である。また内容面としては、全体の構成と論理の展開力、各章ごとのテーマとその展開、方法の有効性、学術研究としての達成度等についてである。以下、それらの検討の結果と本委員会の評価を、要点をしぼって説明していくことにしたい。

まず基礎的な手続きに関してであるが、本論文は、柳宗悦の朝鮮芸術論を、日本人によって書かれた先行する朝鮮美術史と比較検討し、更に朝鮮民族美術館の設立に尽力した柳の当時の朝鮮社会における受け取られ方を、主に新聞雑誌の記事をもとに究明しようとしたものといえる。したがって本委員会では、これらの諸点に関して十分な量の文献を収集し、適切な理解を示しているかを検討した。その結果、当時の朝鮮社会における新聞雑誌の選択にやや不十分な点があるものの、その他の点では適切な質と量の資料が提示されており、各文献の位置づけと解釈も、ほぼ妥当なものであるとの結論に達した。

次に内容面についてであるが、まず学術的な達成度という点からみれば、本論文の重要な成果の一つは、柳の朝鮮芸術論の限界を主に二つの面から説得的に論証した点にある。すなわちそれは、先行する朝鮮美術史の枠組みを借りてその価値の反転を行ったにすぎない点、そして普遍の美／特殊の美の二元論ゆえに、特に文化政治として展開される植民地政策の狡猾さを看過した点である。

このことは従来、柳宗悦の朝鮮芸術論研究が、先行する美術史との関係を見失い、その独自性のみを強調してきたのに対して、大きな変更を迫るものといえる。また日本の植民地政策への協力が抵抗かの二分法によって、単純な柳の評価がなされて来た傾向に対しても、より重層的な検討の必要性を説くものでもあるが、この二点が本論文の第2の成果といえよう。

更に本論文は、こうした柳自身の思想の限界とは別に、当時の朝鮮社会において実に多様な受容のあり方が存在し、柳の美術館設立運動の協力者としてのみ評価されてきた柳兼子の活動にも、まったく別の側面があることを明らかにしている。この点もまた抑圧と服

従という単調な図式に陥りがちな植民地研究に一石を投じるものであり、本論文の第3の成果として評価しうるものである。

もっとも本論文には、ややわかり難い表現が散見される点や、柳の思想的な限界を強調しすぎるあまり、その思想の内実のより複雑な面が看過されるなど、いくつか問題点がないではない。しかし上の三点の成果は、そのうちの一部が全国学会誌に掲載され、少なからぬ反響を呼んだ点からしても、高く評価しうるものであると判断できる。

本委員会は、提出された申請論文を慎重に審査し、また口述試験を実施して十分に審議を重ねた結果、以上に述べたような本論文の評価に鑑み、全員一致して梶谷崇氏に博士(文学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。